令和元年度版

自 平成三十一年四月
至 令和 二 年三月

会報

第三十七号

俳人協会宮城県支部

一、令和元年度回顧

支部長　小林里子

平成三十一年は四月末日を以って終わり、五月一日より令和元年という新しい時代が始まりました。令和元年度の事業計画については、（公社）俳人協会よりご支援、ご指導を戴き、年三回の行事は講師の先生の派遣により、充実した支部活動を図ると共に、多数の会員の参加を得て、開催することが出来ました。

令和となって初の総会では、副支部長一名の交替と幹事の増員等の案を承認戴き、支部長として二期目をスタート致しました。

講師には長嶺千晶先生をお迎えし、「写生、さらに表現の可能性」と題し、熱気溢れるご講演に多くの示唆を戴きました。そしてこの日は、先生が七年の歳月をかけられた労作「今も沖には未来あり―中村草田男『長子』の世界」で平成二十五年第二十八回俳人協会評論新人賞を受賞された時の選考委員長であった柏原眠雨顧問との良き出逢いの日となられましたこと支部として嬉しく思っております。

九月の俳句研修会には、鶴岡市より阿部月山子先生をお迎えし、「俳句のリズムと中七」と題して俳句作りの骨法を芭蕉の句を例に解説戴きました。更に地域の行事に造詣の深い先生に、黒川能と出羽三山神社の松例祭について懇切にご紹介戴き、風土の心に触れる思いの一時で、参加者一同熱心に聞き入りました。

一月の新年賀詞交換会には、浅井民子先生をお迎えし、「俳句という扉」と題し、俳句という小さな詩の器の持つ大きな可能性について興味深いご講演を戴きました。浅井先生は仙台ゆかりの支倉常長に関心を持たれておられ、寒い冬の一日、仙台北山の光明寺にある常長の墓所にご案内致しました。その折の常長とソテロの小さな墓碑を彩るように囲む冬紅葉の美しさは、今も目に浮んで参ります。

先生方には、講演要旨を以って御礼とさせて戴きます。

今回で三回を数える特別企画には、坂内佳禰顧問の角川照子前「河」主宰の生涯を俳句を紹介されつつ詳らかにされた福島県支部での講演録と此の度句集『朝晩』で第五十九回俳人協会賞を受賞されました小川軽舟「鷹」主宰の句を一年に亘り鑑賞した鶴岡行馬氏の作品を掲載させて戴きました。支部は学びの場でもありますので、ご精読いただきたいと思います。

次に宮城県内の結社の動向に触れますと、昭和二十七年に永野孫柳によって創刊され、宮城県俳壇に大きな役割を果たして来た「俳句饗宴」が、十二月に七七二号を以って終刊し、六十七年の歴史を閉じました。そして「澪」が同じく十二月、六三六号を以って休刊となりました。「澪」は記紀神話の研究で知られた梅澤一栖により創刊された俳誌で、「澪」主宰であった梅澤一栖、菅野洋々が二代目、四代目の宮城県支部長を務められ、宮城県支部の発展に寄与された結社だけに休刊となったのは残念なことでした。しかし結社はそのままで句会を続けておられるのは何より嬉しいことです。

新天皇の即位と共に始まった令和元年は、一方で自然災害の多い一年でした。六月には山形県沖を震源とする最大震度六強の地震。九月には台風一五号による千葉県内の甚大な被害。そして十月には台風一九号の記録的な降雨により各地で河川が氾濫し堤防は決壊、土砂災害など大きな災禍が続きました。宮城県でも丸森町、大郷町等で大きな被害となりました。そして年度末になって、十二月に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルスの世界的な感染爆発という未曾有の事態に直面、更に四月七日には日本政府により特別措置法に基づく「緊急事態宣言」が発令され、日本経済は戦後最大の危機の中にあります。そして宮城県内の感染状況も日々刻々変わってゆき、先の見えない状態にありますが、新型コロナウイルスの一日も早い収束と確かな日常が戻ることを願いながら、推移を見守りつつ支部活動を続けて参りますので、何卒ご理解ご協力を下さいますようお願い申し上げます。

二、令和元年度俳人協会宮城県支部総会

令和元年五月二十五日
於・東京エレクトロンホール宮城
参加人数　八十四名

第一部　総会

司会　支部幹事　木村裕一

1　物故者への黙禱
2　開会のことば　司会　支部幹事　木村裕一
3　挨拶並びに講師紹介　支部長　小林里子
4　議長選出　議長　副支部長　鶴岡行馬
5　議事
(1)　平成三十年度事業報告　事務局長　髙宮義治
(2)　平成三十年度収支決算報告　会計幹事　佐々木三太郎
(3)　平成三十年度監査報告　監事　三浦克實
(4)　平成三十一年・令和元年度事業計画(案)　事務局長　髙宮義治
(5)　平成三十一年・令和元年度収支予算(案)　会計幹事　佐々木三太郎
(6)　役員改選(案)　選考委員長　菊池ゆう子
6　表彰
(1)　米寿記念品の贈呈　支部長　小林里子
(2)　役員勤続十年表彰
7　新会員支部枠推薦　支部長　小林里子
8　新旧役員の紹介　事務局長　髙宮義治

第二部　講演会

講師　（公社）俳人協会幹事　長嶺千晶
演題　「写生、さらに表現の可能性」

司会　支部幹事　木村裕一

第三部　俳句会

司会　支部幹事　塩沢ゆたか

1　選句（講師選並びに互選）
2　披講　支部幹事　渡辺柊子・小野寺みち子
3　選評　本部講師　長嶺千晶
4　表彰　本部講師　長嶺千晶・支部長　小林里子
5　閉会のことば　副支部長　屋代ひろ子

第四部　懇親会

於・東龍門

司会　支部理事　菊池ゆう子

1　開会のことば　支部顧問　柏原眠雨
2　乾杯　支部顧問　坂内佳禰
3　懇談
4　閉会のことば　事務局長　髙宮義治

入選句

本部講師　長嶺千晶　選

特選

この海に魂鎮もりぬ桜貝　勝又典子
手話を以て「雨ニモマケズ」木の芽晴　二本柳力彌
牛の餌に糠にぎり足す穀雨かな　鈴木ヨシエ

秀逸

出漁を煽る船尾の鯉幟　佐藤べん
オノマトペ多き小説猫の恋　槇尾麻衣
風音を集む一樹雁供養　篠沢亜月
山荘へつづる渓音木の根あく　髙橋眸
単線の北へ伸びたる桜桃忌　小久保顕

入選

味噌樽の箍の緩びや昭和の日　安達朝子
空青きまま春月を迎へけり　幸野峰
埴輪百体虫出しの雷続けざま　佐野久乃
猫の子を川に流ししことをなほ　鶴岡行馬
黄砂来る大陸の禍もろともに　渡辺柊子
今の世にAI兵器蝌蚪生まる　堀之内久子
手品師の取り出すリボン緑さす　宮野かほる
卒業やはちきれさうなわが写真　郷内不二子
八咫烏の小さき御守り新社員　佐々木潤子
隣から今年も届く蓬餅　山本透

二、令和元年度俳人協会宮城県支部総会

令和元年五月二十五日
於・東京エレクトロンホール宮城
参加人数　八十四名

第一部　総会

司会　支部幹事　木村裕一

1　物故者への黙禱
2　開会のことば　司会　支部幹事　木村裕一
3　挨拶並びに講師紹介　支部長　小林里子
4　議長選出　議長　副支部長　鶴岡行馬
5　議事
(1)　平成三十年度事業報告　事務局長　髙宮義治
(2)　平成三十年度収支決算報告　会計幹事　佐々木三太郎
(3)　平成三十年度監査報告　監事　三浦克實
(4)　平成三十一年・令和元年度事業計画(案)　事務局長　髙宮義治
(5)　平成三十一年・令和元年度収支予算(案)　会計幹事　佐々木三太郎
(6)　役員改選(案)　選考委員長　菊池ゆう子
6　表彰
(1)　米寿記念品の贈呈　支部長　小林里子
(2)　役員勤続十年表彰
7　新会員支部枠推薦　支部長　小林里子
8　新旧役員の紹介　事務局長　髙宮義治

第二部　講演会

講師　（公社）俳人協会幹事　長嶺千晶
演題　「写生、さらに表現の可能性」

司会　支部幹事　木村裕一

第三部　俳句会

司会　支部幹事　塩沢ゆたか

1　選句（講師選並びに互選）
2　披講　支部幹事　渡辺柊子・小野寺みち子
3　選評　本部講師　長嶺千晶
4　表彰　本部講師　長嶺千晶・支部長　小林里子
5　閉会のことば　副支部長　屋代ひろ子

第四部　懇親会

於・東龍門

司会　支部理事　菊池ゆう子

1　開会のことば　支部顧問　柏原眠雨
2　乾杯　支部顧問　坂内佳禰
3　懇談
4　閉会のことば　事務局長　髙宮義治

入選句

本部講師　長嶺千晶　選

特選

この海に魂鎮もりぬ桜貝　勝又典子
手話を以て「雨ニモマケズ」木の芽晴　二本柳力彌
牛の餌に糠にぎり足す穀雨かな　鈴木ヨシエ

秀逸

出漁を煽る船尾の鯉幟　佐藤べん
オノマトペ多き小説猫の恋　槇尾麻衣
風音を集む一樹雁供養　篠沢亜月
山荘へつづる渓音木の根あく　髙橋眸
単線の北へ伸びたる桜桃忌　小久保顕

入選

味噌樽の箍の緩びや昭和の日　安達朝子
空青きまま春月を迎へけり　幸野峰
埴輪百体虫出しの雷続けざま　佐野久乃
猫の子を川に流ししことをなほ　鶴岡行馬
黄砂来る大陸の禍もろともに　渡辺柊子
今の世にAI兵器蝌蚪生まる　堀之内久子
手品師の取り出すリボン緑さす　宮野かほる
卒業やはちきれさうなわが写真　郷内不二子
八咫烏の小さき御守り新社員　佐々木潤子
隣から今年も届く蓬餅　山本透

〈互選高得点〉（五点以上、入選句を除く）

田を植ゑて青き地球の膨らみぬ　勝又典子

石蹴りをする島の子の日永かな　髙平悦子

ワイシャツの腕のイニシャル夏立てり　鶴岡行馬

講師紹介　長嶺　千晶氏

昭和三十四年生まれ。同五十七年、中村草田男主宰「萬緑」入会。平成元年萬緑新人賞。同十六年萬緑賞、翌年退会。同十八年「麟」を経て「ににん」に所属。同二十四年「晶」創刊、代表。同二十六年『今も沖には未来あり―中村草田男『長子』の世界』で俳人協会評論新人賞。句集に『晶』『夏館』『つめた貝』『白い崖』『雁の雫』等。

代表句

油絵に昭和の暗さ夏館

頬杖は夢見るかたち風光る

箔置くごとし残照の白鳥は

（公社）俳人協会幹事　長嶺　千晶

講演要旨

「写生、さらに表現の可能性」

歴史的経緯を見ると、「写生」を唱えたのは、子規。これは、絵を描くときの方法で、写実的に表現しようとするスケッチに当たる。この方法により、俳句は日常の出来事を写実的に詠むことに内容が変わっていき、素描的な作品になった。子規を継承する虚子は、「客観写生」を唱えたが、それがいかなるものかは定義していない。虚子が唱えた「客観写生」の実践者は高野素十と言われる。その特徴は、対象に対してまるでカメラのレンズのように即物的に描写しようとしていることだ。句の中に作者の存在は見えてこない。波多野爽波の場合の写生は、表現の方法ではなく、作句の実践的な方法である。多作により己が空の状態になるまで作句を重ね、俳句を作ろうとする意識を捨てて無意識の領域での俳句を詠むことで、己を超越した俳句を作ろうとする実践的方法を「写生」と名付けた。子規、虚子、爽波の「写生」は三様だが、主観性を排除していることは共通している。だからこその「スケッチ」であり、「客観」さらには「自己の無意識化」なのだろう。

表現方法としての「客観写生」を考えてみたい。例えば、あめんぼうが小川の水を蹴って前に進もうとしているが、ツッと流されてしまうという光景をどう一句にできるか。〈進んでも後戻りする水馬〉とすれば、報告句と言われるかもしれない。描写のない表現は、物事の説明になりがちだ。〈小流れに押し戻されて水馬〉の場合、主観を排除し、あめんぼうの生態を水の流れに主眼をおいて描写している。対象への切り口によって、客観写生における独自性があらわれるといえる。〈流さるることを恐れず水馬〉となると、主観を入れた表現になる。こうなると、あめんぼうの生態の写生を超えて、あたかも人間のこころざしまでが感じられ、一句が重層性を帯びてくる。客観写生がスケッチだとすれば、自分という色彩で塗り上げた絵画作品になったといえる。つまり、同じ情景をどのように表現するのかによって、俳句が報告的にも写生的にも、さらにはスケッチを超えた作品にもなりうるのだ。

俳句に求められるものは何か。それは、詠みたいという内容と俳句の骨法と言われる形式との一致だと思う。私たちはさまざまな問題を抱えた現在を生きている。この時代にあって、俳句を作るための俳句を詠みつづけることは、趣味的な一種の現実逃避となりはしないかと恐れる。未曾有の災害を経て、私たちには写生による表現では詠みきれない想いが絶対にあるはずである。だからこそ、今、この時を生きる自己表現としての俳句を目指して、写生を超えた新たな表現を「俳句」という形式でしていかなければならない。単なる「写生」というスケッチではなく、作品化してゆく時、そこにそれぞれが表現の可能性を見出して、ひいては「俳句」という表現の可能性を探ることになるのだ。

（宮野かほる・記）

三、令和元年度俳人協会宮城県支部俳句研修会

令和元年九月十四日
於・東京エレクトロンホール宮城
参加人数　八十六名

第一部　講演会

1　開会のことば　　司会　支部幹事　木村裕一
2　新会員紹介　　支部長　小林里子
3　挨拶並びに講師紹介　　支部長　小林里子
4　講演　講師（公社）俳人協会評議員　阿部月山子
　　演題「俳句のリズムと中七」

第二部　俳句会

1　選句（講師選並びに互選）　　司会　支部幹事　杉山三枝子
2　披講　　支部幹事　小野寺みち子
　　支部幹事　渡辺柊子
　　支部幹事　髙村龍彦
　　本部講師　阿部月山子
　　本部講師　阿部月山子
　　支部長　小林里子
　　副支部長　鶴岡行馬
3　講評
4　表彰
5　閉会のことば

第三部　懇親会

於・東龍門

1　開会のことば　　司会　支部幹事　槇尾麻衣
2　乾杯　　支部理事　佐藤拓郎
3　懇談　　支部顧問　坂内佳禰
4　閉会のことば　　支部理事　菊池ゆう子

入選句

本部講師　阿部月山子　選

特選

島影を一つ浮べて遠花火　　佐々木三太郎
打水の庭に北上川の風　　髙宮義治
代々の石積む棚田稲の花　　大沼せつ子

秀逸

作業小屋一番藍の干されけり　　松本眞澄
芋茎干す月山の風くる軒端　　黒田洋子
ででぽぽの居久根に鳴ける朝曇　　鈴木勝也
夏萩や祇園小路の犬矢来　　尾形紀美子
新涼の卓に蔵王の豆腐かな　　佐藤圭子

入選

梅雨茸踏みしだかれて行者道　　二本柳力彌
氷菓売る米軍キャンプゲート前　　相内をさむ
黒々と鯉の寄り来る広島忌　　堀之内久子
軽やかに舞へる日のあり大毛虫　　宮野かほる
新涼や車掌の腰に鍵の束　　坂内佳禰
産土に響く笙の音秋立ちぬ　　猿賀郁子
紙魚走る母の書きたる和裁帳　　小林雅子
海鞘割きて三陸の香のあふれけり　　木村裕一
哲学の小径の萩や弓の句碑　　岡本幸治
梅雨晴や津波浸水示す標　　石垣弘子

〈互選高得点〉（五点以上、入選句を除く）

ユニセフのシールの届く原爆忌　　佐藤千枝
抱き上げし子にいつぱいの秋夕焼　　小久保顕
唖蟬の腹の波打つ敗戦忌　　相内をさむ

講師紹介　阿部月山子氏

昭和十六年六月、山形県生まれ。昭和四十五年「風」入会。昭和五十六年「春耕」に同人参加。月山子の俳号は「春耕」主宰の皆川盤水先生よりいただいた。昭和五十八年「風」同人。平成十三年沢木欣一逝去により「風」終刊。平成十四年「万象」同人参加。同年、「月山」創刊主宰。

昭和五十一年第七回サンケイ全国俳句大会に「涅槃図」の句で文部大臣賞。平成十八年高山樗牛賞、平成三十年齋藤茂吉文化賞。

現在山形県俳人協会顧問。「月山」主宰。「春耕」同人副会長。「万象」幹部同人。句集に『月の山』『湯殿嶺』

代表句

涅槃図の皆泣いてゐてあたたかし
天焦がす対の火柱松例祭
黒川能ああおああおと鼓打つ

講演要旨

「俳句のリズムと中七」

俳句は、五・七・五（十七音の定型詩）です。俳句は、五・七・五の三文節のうち、どの文節かは字足らずで、全体として十七音詩になっているという場合もあります。いわゆる句またがりですが今回は、三文節の七音に絞って取り上げます。

宇多喜代子氏は、俳句の善し悪しは、中七の出来で決まると言っています。中七の内容と並んで大切なのが、リズム（調べ）です。特に俳句大会や俳句会で、入選するために一生懸命に作句に取り組んでいる方々にとって、七音の組み立てで選者の印象に残るかが決まるからです。リズムの良否は中七の出来、不出来で決まります。

◎中七は中七でなければならない

イ．中六は字数が足りないので、句がずっこけたようになり、句の形にならない。

ロ．中八はリズムが崩れ、句が間延びしたようになる。

ハ．中七は物の名称や熟語等でも一つできまるものは少ない。七音の中に切れが入り、二つないし三つの言葉を合成して表現することが多い。その分け方で出来、不出来が決まる。

芭蕉の「奥の細道」は、大変参考になるので例句として使用させてもらいます。

① 垂直一本　名詞や動詞等が七音、又は、名詞や動詞に助詞を付けた言葉が七音になる句。句がストレートで分かり易い。

剃り捨てて黒髪山に衣更　（曾良）

② 三・四　名詞や動詞等に助詞を付けた言葉が上三音、下四音に分かれる句。リズム感があり、すうっと頭に入って来る。

あやめ草足に結ばん草鞋の緒
雲の峰いくつ崩れて月の山

③ 四・三　名詞や動詞等に助詞を付けた言葉が上四音、下三音に分かれる句。詠み易く読み易い。すうっと頭に入って来る。

五月雨を集めて早し最上川
蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

④ 二・五　上二音、下五音に分かれる句。句に勢いが出る。

涼しさやほの三日月の羽黒山
あかあかと日はつれなくも秋の風

⑤ 五・二　上五音、下二音となる句だが、流れを悪くして、間怠くなりやすいので避けたほうが良い。

中七のリズムは、佳句を生み出す原動力となりうるので、皆さんの作句の参考になれば幸いです。

（高平　悦子・記）

四、令和元年度
俳人協会宮城県支部新春賀詞交換会

令和二年一月十八日
於・東京エレクトロンホール宮城
参加人数　九十四名

第一部　講演会

1　開会のことば　　司会　事務局長　髙宮義治
2　新入会員の紹介　　事務局長　髙宮義治
3　挨拶並びに講師紹介　　支部長　小林里子
4　講演　講師（公社）俳人協会幹事　浅井民子
　　演題「俳句という扉」

第二部　俳句会

司会　支部幹事　杉山三枝子

1　選句（講師選並びに互選）
2　披講　　支部幹事　小野寺みち子
3　講評　　支部幹事　杉山三枝子
4　表彰　　本部講師　浅井民子
　　本部講師　浅井民子
　　支部長　小林里子
　　副支部長　木村裕一
5　閉会のことば

第三部　懇親会

於・東龍門

1　開会のことば　　司会　支部幹事　二本柳力彌
2　乾杯　　支部顧問　柏原眠雨
3　懇談　　支部顧問　坂内佳禰
4　閉会のことば　　支部理事　佐藤拓郎

入選句

本部講師　浅井民子選

特選

寒雁の傾れ込んだり沼暮色　　三浦克實
立つて見せ回つて見せて春着の子　　寒河江桑弓
小春日を授かる島の二百軒　　富樫文子

秀逸

ねんごろに落葉掃かるる苔の上　　本田幸逸
独眼竜の高き鼻梁や冬日燦　　伊藤一男
雪しんしん逢いたくて乗る始発かな　　渡辺柊子
冬雁の空へ地織りの糸干せり　　坂内佳禰
うたた寝の夢に母ゐる炬燵かな　　佐藤啓子

佳作

鳥とほく過る日の出の冬の海　　髙宮義治
冬うらら絵本読むこゑ使ひ分け　　寒河江桑弓
松島や卒寿の夫と牡蠣小屋に　　髙橋洋子
温め酒百歳めざす顔ばかり　　小野寺みち子
鮟鱇を糶落としたる胴間声　　二本柳力彌
面舵も取舵もなき宝船　　二本柳力彌
定期船に御慶を交はす郵便夫　　杉山三枝子
一筆に生まるる山河冬ともし　　小林里子
月山へとぶ白鳥の一直線　　佐藤千枝
露天湯の下は荒波初閻魔　　井場敏子

〈互選高得点〉（五点以上、入選句を除く）

蒲団より小さき怪獣ひとつ出づ　　屋代ひろ子
冬薔薇や終刊号といふ重さ　　小林里子
獅子舞に頭差し出す留学生　　佐々木潤子

講師紹介　浅井　民子氏

昭和二十年、岐阜県生まれ。幼少時に東京へ転居し、小中高校を過ごす。東京都国立市在住。平成十年「帆」入会、関口恭代（やすよ）創刊主宰に師事。平成二十二年、師の病のため、急遽、主宰を継承し、現在に至る。

（公社）俳人協会幹事。平成三十年句集『四重奏』により、日本詩歌句協会俳句部門大賞受賞。

句集『黎明』『四重奏』

代表句

ハーレーを降りてたちまち桜人

龍天に金平糖に角（つの）生まれ

絹鳴りの闇ふかぶかと雪女郎

講演要旨

「俳句という扉」

私が俳句という詩型を意識したのは、一九九五年の阪神淡路大震災の折。この時発表された多くの詩歌を読み、短歌と俳句の違いを感じた。短歌は、作者の思いが言葉で言い尽くされ、完結した形でそのまま読者に手渡される。一方、俳句は、語られなかった余白や沈黙から作者の思いが立ち上がり静かなうねりとなって押し寄せ、読者を圧倒する。俳句は、作者の体験を読者の体験とすることのできる大きな力を持っている。更に、俳句では季語の存在が大きい。俳句は、季語が喚起するものからイメージが広がり、臨場感をもって読者に肉薄してくる詩型である。

阪神淡路大震災の数年後俳句を始めて、俳句は広大無辺の世界へ開く扉であることを知った。季語を通し長い歴史の重みをもつ文化や自然へ、またミクロの世界から壮大な宇宙へと時空を超えて様々な世界が俳句という扉の先に広がっていた。同時に自分という一個の人間を掘り下げていく扉でもあった。また、俳句は「座の文芸」というように、句会を通して未知の人々との出会いへ開かれる貴重な扉でもある。更に、十七音字の言葉を通して自己と他者の存在を認め合い肯定することで、より広い豊かな詩の世界が生まれ、私たち自身も創作者になれる芸術なのだ。

以前、俳句総合誌の「俳句とは何かを十字以内に答えるなら」という問いに「俳句とは何でも入る大きな器」と答えた。世界で最も短い俳句という詩型は他に類を見ないほど大きな世界を内包している。人間の一生は短く、小さな存在だが、誰もが広大無限の宇宙を内に持っている。俳句はそれに近づき、新たに開くための扉でもある。又、過ぎ去った時を開く扉、未知への扉でもあるのだ。

「笑い」と「詩を詠むこと」と「想像と創造」は人にのみ与えられた天与のもの。日々生きるという経験によって培われ蓄積された想像力は創造の基となる。これらを駆使して表現できる俳句を持つことは幸いであることと思う。自然災害が苛烈になり、生きることの困難さを詠まないではいられない状況がある。詠むことが生きる力となり、救いとなるような極限の状況を詠むことの重さは計り知れないことである。また、災害そのものを詠まない場合でも、その作品はその人によってかけがえのないものであり、大切な宝である。俳句の扉は計り知れないほど広く深い世界へ広がる扉なのである。

（篠沢　亜月・記）

八、特別企画Ⅰ

俳人協会福島県支部総会・講演　令和元年六月二十五日

角川照子の俳句行脚

（公社）俳人協会評議員　「河」同人　坂内佳禰

坂内佳禰と申します。ご丁寧なご紹介恐縮しております。約1時間みなさまの貴重なお時間を頂きます。

表題を「角川照子の俳句行脚」といたしました。角川照子と言えば〈京の塚近江の塚や花行脚〉という人口に膾炙した作品があるからです。「京の塚」は京都嵯峨野の落柿舎（芭蕉十哲の一人、向井去来の庵）近くにある「去来塚」です。「近江の塚」は、近江の膳所にある義仲寺（松尾芭蕉の墓所に木曽義仲の墓所のある寺）を訪ねた昭和59年春の作です。

照子の夫、角川源義（角川書店創立者、文学博士、「河」創刊主宰）に〈花あれば西行の日とおもふべし〉という一代の名吟があります。この作品は仙台の針惣旅館で開かれた安藤清峰句集『イブの末裔』出版記念句会に投句されました。昭和49年5月3日と日付も知られています。照子は実作はまだしておりませんが同道しておりました。

照子の「京の塚」は「花あれば」の10年後の作ということになります。俳人角川照子の誕生を俳句界に知らしめた作のように思えます。角川家の墓所は小平霊園にあるのですが、両句共に直筆の句が刻まれております。のぞき込みたくなるような小さい句碑です。

辺見じゅん、本名角川真弓、源義の長女です。歌人でノンフィクション作家でもありました。8年前、あの東日本大震災が発生した年に急逝されてしまいました。

その辺見が『増刊アサヒグラフ―俳句の世界―』（昭和60年10月10日刊）で「角川照子」を「人の心の深い悲しみ」という表題で紹介しているのです。冒頭の数行を紹介してみます。

「俳人角川照子にとって、夫、源義の突然の死がなかったなら、俳人としての彼女の境涯はなかったろう。妻であり、母としてのつつましい一生があっただけであり、それを誰よりも希んでいたのが、照子だった。」（後略）

妻として、母としてつつましい一生をおくりたいと願っていた照子が、なぜ俳人角川照子になったか、ならざるをえなかったかをお話できればと思っております。

年譜をご覧下さい。この年譜は『花神　俳句館　角川照子』（平成11年9月20日刊）に付された照子自筆の略年譜に長年「河」の編集長をされた佐川広治氏が補足、私が少々加えさせて頂きました。

昭和50年　47歳。

10月27日午前11時57分、源義永眠。行年58。11月5日、築地本願寺で角川書店葬。29日、小平霊園に納骨。

この年譜には書き入れてありませんが、角川書店発行の総合誌『俳句』の昭和51年2月号は「角川源義追悼特集」でした。そこに照子は12頁にわたって「看病日誌」を書いております。

「いのち離れゆく源義先生のお姿や絶句とされる〈後の月雨に終るや足まくら〉をメモされたことや、前年（昭和50年）の『俳句』11月号に掲載された「三番日記」を顔をつけるように読まれていたご様子など克明に綴られてありました。」（後略）

と、私は今年の「河」2月号の『源義の日』角川春樹句集鑑賞に書きました。ここに私自身を登場させるのは憚かられるのですが、お許しください。

私は昭和47年、25歳から俳句の実作をはじめ、森澄雄創刊主宰された「杉」に投句しはじめておりました。と申しますのも米沢女子短大で私に俳句の種を蒔いてくださいました川崎展宏先生が「杉」の編集長をされておられたからです。当時も仙台に住んでおりました。夫は国鉄職員でしたから転勤族ではありましたが。句集や総合誌を読んではいましたが、句会には一度も参加したこともなく一投句者にすぎませんでした。新鮮な俳句を学びたいという一心で総合誌を貪るように読みました。そこに「俳人角川源義の世界」が網羅されていたのです。若い、愛らしい妻が「看病日誌」を綴っておられたのです。後に、と申しましても4年後ですが、「角川照子主宰」と、お呼びするようになることなど想像だにしておりませんでした。

照子にとって源義の死によってもたらされた主宰の座です。

「河」はいろいろあったようです。私は昭和55年8月に入会しましたので当時のことは知りません。

昭和54年1月号から新生「河」の体制が組まれたようです。

主宰　角川　照子
副主宰　角川　春樹
選者　吉田　鴻司
幹部同人　辺見じゅん
編集長　佐川　広治

昭和54年1月号に照子の句が「源義出づ」の表題で5句掲載されています。それも主宰欄ではなく当月集欄の後から2番目にです。

源義出づ

写経終へしばかりの筆や秋燕忌
師走空赫しと思ひ硝子拭く
炬燵辺に辞書高く積み初心かな
小春日の椅子かげひきてゐたりけり

「河」には「青柿山房だより」があります。「日録の形をとった四季のスケッチであり、俳話ともなっているのが素晴らしい」と評されています。照子は毎月の選は選者にまかせ、俳論というものは執筆しませんでしたが、「青柿山房だより」を通して河衆の心深くに入っていったのだと思います。昭和54年1月号から逝去される平成16年8月号まで25年間一度の休載もありません。第1回目に昭和45年5月21日に18歳で亡くなられた次女真理への思いを書いています。

「私が〈河〉に親しみ始めたのは、娘真理を亡くしてからでした。それまでは〈河〉を家に持込むことがなかったからです。子を亡くすことは、主人を亡くしたことよりも、より深い悲しみでした。どんなに隣で主人に慰められてもどうしようもない、それこそ奈落の底に落ち込むような気持は長く癒えませんでした。本当に心臓が破裂しそうな、胸の張り裂ける思いを毎日毎日繰り返しました。主人は私以上にそのような気持ちだったのでしょう。その時、河衆の皆様が、本当に心配して下さいました。私もともに慰められたいと皆様と親しむようになりました。」（後略）

角川源義の第4句集『冬の虹』は次女真理の追悼句集です。

五月二十一日次女真理逝く　享年十八歳

婚と葬家にかさなる聖五月
薔薇大輪稚(わか)ければ神召されしや
たけくらぶ吾子はあらずよ今年竹
ふたなぬか過ぎ子雀の砂あそび

『冬の虹』の「あとがき」に「真理を野辺に送った日から気力を失ひ、何事にも手のつかぬ日々をすごした。年齢に似合わぬ晩年の意識が生じた。」（後略）

と源義先生は述べておられます。

では角川照子が「河」主宰に就任するまでを「略年譜」でたどっ

てみましょう。重複する箇所はお許しください。

昭和3年12月14日、東京府に父中井繁一、母志ずの次女として生まれる。父は印刷業、ローマ字普及に力を尽くす。日本初のローマ字詩集を出版。

昭和16年　13歳
目黒商業女学校入学ののち繰り上げ卒業。

昭和21年　18歳
協和銀行荻窪支店に就職。支店長より俳句の手ほどきを受ける。

昭和24年　21歳
角川源義と結婚。真弓（辺見じゅん）10歳。春樹7歳。歴彦6歳。

昭和26年　23歳
7月29日、次女真理誕生。

昭和27年、源義の父源三郎永眠。28年、源義の母八重永眠。29年実父繁一永眠。

昭和30年　杉並区西田町（現荻窪三丁目）に新居を構える。

昭和33年　多摩文庫（製本業）創立、のち社長に就任。12月「河」創刊。主宰源義。

昭和45年　5月21日次女真理永眠。享年18
昭和50年　10月27日夫源義永眠。享年58
昭和54年　1月「河」主宰就任。

照子は51歳になりました。主宰就任3年にして第1句集を上梓しています。どれだけの勉強を重ねられたか想像に余りあります。その勉強の集積であり成果である句集を紹介します。

第1句集『幻戯微笑』昭和56年牧羊社刊。442句収録。

写経終へしばかりの筆や秋燕忌　昭和53
霜降や茶を焙ずれば源義出づ　〃
七夕や遺髪といへるかろきもの　昭和54
暁の夢幻戯微笑の蟬の声　昭和54
二の酉や淡島堂に人栖む灯　〃
筆の穂の白きが儘に二日過ぐ　昭和55
寒昴幼き星をしたがへて　〃
睡り深しいま白鳥も枯葦も　〃
絵らふそく一対土産に余花の雨　〃
さいはての句碑に掛け置く春ショール　昭和56

当時角川文化振興財団理事長で文芸評論家の山本健吉が跋を寄せています。ご紹介します。

「（前略）人に目立たないで、低声で、心の真実を陳べようとする、これは源義氏にも春樹氏にもない、照子夫人独特の叙情だろう。」（後略）

と。照子俳句の本質を見事に言い当てた評言だと思います。作品について少々解説させて頂きます。

1句目の「秋燕忌」は、夫であり「河」の創刊主宰の角川源義の忌日です。源義の第2句集名は『秋燕』です。昭和37年10月6日飯田蛇笏の葬儀に参列した時の作に〈篁に一水まぎる秋燕〉があります。源義は蛇笏の高風を慕い近代俳句の立句の最後の人とも思っておりました。句集名ともし、ご自身の忌日名ともなったのです。多くの歳時記に立項され、沢山の例句が収録されています。

4句目は句集名ともなった作品です。「幻戯」ゲンギは源義ゲンギに通いネンゲミシヨウ（拈華微笑）にも通います。

6句目は書家でもある照子の正月二日の姿です。正月二日は書き初めの日です。それが…という次第です。お持ちしました句集には見事な筆跡で染筆されてあります。のちほどご覧ください。

7句目、照子は「幼い頃、人は死ぬとお星さまになると聞かされ、それを信じていた。今もその幼な心は消えない。昴は源義、従う星は真理」

と、自註しています。照子が永眠したのは平成16年8月9日、その忌日を「昴忌」と角川春樹「河」主宰が名付けました。

8・9句目は会津での作。会津には「河」の有力な俳人がおられました。なかでも山口水青氏のご尽力で猪苗代湖畔に照子の第2句碑が建ちました。近々発行される『福島吟行案内』にも収録されることでしょう。

10句目は、能登の馬緤（まつなぎ）海岸に源義句碑〈冬濤や百日の唄あますなし〉が昭和55年8月に建ちました。当地の古老の「砂取唄」を聞いて作句されたそうです。句碑まで建ちながら句集に収録されない不思議な句なのです。照子は句碑建立の折は出席できなかったと翌昭和56年の春に訪ねているのです。この「春ショール」の色は小豆色だそうです。晩年、平成11年にも再訪しております。

第2句集『阿吽』昭和58年牧羊社刊。351句収録。

佃島に人住むにほひ春の昼　昭和56
長寿眉と云はれしことも秋燕忌　〃
二人静一人静よりさびし　〃
白鳥の帰るべく声揃へけり　〃
亡娘の声の階にころげて梅若忌　〃
良寛のことに風の字囀れる　〃
盆燈籠ともす一事に生き残る　〃
新巻の塩のこぼれし賑はひや　昭和58
挽ぐ一人受けるひとりや柚子の空　〃
重ね着て吾も阿吽の間に在る　〃

どの作品も難しい言葉など使われていません。平易な言葉でありながら、内容が深いので読み手の心にしみわたってきます。

4句目も会津での作です。照子は会津の方々と親しまれました。源義亡きあと新生「河」を心から応援してくださる方が多かったのだと思います。私自身、会津坂下町の在の生まれですので、照子俳句に会津の地が詠まれていますとゴシック体で見えてくるような錯覚に陥ります。

7句目。まことに照子の後の半生はこの句の示す通りの生き方だったと思います。

8句目は主婦であり、俳人の目差しがあってこその作品です。

10句目は「阿吽の呼吸」という言葉がありますが、夫源義との関係をものがたっていると思います。

第3句集『花行脚』昭和61年角川書店刊。358句収録。

初花や齢のほどの水明り　昭和58
夫あらば子あらばこそおでん種　〃
犇めきて河豚のどの顔啼きしかな　〃
水明り花明り母老い給ふ　昭和59
京の塚近江の塚や花行脚　〃
狼毫をもて秋風の詩書かむ　〃
秋濤や亡き子を探す遠眼鏡　〃
燕帰る夫と子の忌の外詠まず　〃
前の世に聞きしと思ふ百千鳥　昭和60
ゆく春の没日大事に吉野山　〃

この句集は『ミセス』などを出版していた文化出版局の第11回現代俳句女流賞に輝きました。選考委員は、飯田龍太、鈴木真砂女、野沢節子、細見綾子、森澄雄の各氏です。

作品の解説は省略します。昭和58年、当時の角川春樹副主宰の発案で花の吉野で吟行会が催されました。副主宰の指導する新人会のメンバーもお供させて頂きました。私もその栄に与りました。昭和58年は山本健吉先生ご夫妻に令嬢安見氏。小説家の中上健次先生。照子主宰、春樹副主宰、辺見じゅん先生、佐川広治編集長そして新

人会のメンバー。59年は照子主宰はご欠席。60年は森澄雄先生ご夫妻が新たにご参加されて心おどる句会が展開されました。1、9、10句目が吉野の句座に投句されました。

第4句集『秋燕忌』平成7年角川書店刊。579句収録。

メロン食む遠く遠くに父の詩　昭和61
ぬか床のまだ生きてをり秋燕忌　〃
ぽつかりと円座一枚残さるる　昭和63
カトレアの翔つかに華甲迎へけり　〃
襲の国や石蕗の黄花の丈高く　平成2
枇杷の種こつんころんと独りかな　平成3
かくし持つ念珠一連後の月　〃
綾取りを渡す子の手のなかりけり　平成5
どれもこれも目出度く曲がるごまめかな　平成6
かにかくにまづ箸にせよ菊膾　〃

この句集は10年振りに源義20年祭に向けて編まれました。10句目は「春樹帰る三句」の前書を持つ中の一句で『秋燕忌』の掉尾の作品です。大変な心労を重ねながらまぎれもない母、照子の姿です。

第5句集『すばる』平成17年角川書店刊。793句収録。

花遍路写真一葉しのばせて　平成8
次の世は花菜となりて生まれたし　平成9
さいはての句碑に老斑そぞろ寒む　平成11
さうめんの淡き昼餉をすませしか　平成15
咳ひとつ抑へてすする晦日蕎麦　平成16
さきがけの泰山木は源義花　〃
夏帯の蝶をたたみしままにかな　〃
短夜を長し長しと病みにけり　〃
花莫蓙の花につまづき癒えおそし　平成16
もう一度つばな流しに立ちたしよ　〃

照子は挨拶句、なかでも追悼句の名手です。『秋燕忌』の3句目「ぽつかりと」の句には「悼　山本健吉先生」の前書が付されています。源義亡き後角川家を精神的に支えてくださった大恩人の死の大きさが「ぽつかりと」に象徴されています。また『すばる』の4句目「さうめんの」句にも「悼　草間時彦さん」の前書があります。照子は俳人協会の理事でした。草間氏は理事長でした。役職よりも源義在世時、以後も俳句を通して親交のあった俳人でした。草間氏には〈さうめんの淡き昼餉や街の音〉があるのです。下五を変えただけで見事な悼句をおくられました。

照子は間質性肺炎という難病で入院手術をしています。句が示すようになかなか退院できません。そんな平成16年4月8日、春樹副主宰は出所され翌日には主宰を見舞われ、あれよあれよという間に退院されて京都の表千家喜寿祝賀会にも出席。主宰交代もスムーズに済んだ8月9日、急逝されてしまったのです。日頃から俳人角川照子としての葬儀をのぞんでおられたそうです。8月18日、青山葬儀所で蟬時雨のなか厳かなご葬儀が執りおこなわれました。全国から参列した会員はそれぞれの思いで照子主宰を偲びました。私も参りました。今秋開催される松島全国大会をお守りくださいますようにと祈りました。

そして平成17年8月9日発行の遺句集『すばる』が贈られて参りました。そこには春樹主宰の「跋に代えて―慈顔の笑顔」の一文が載り〈遺(のこ)されて母の扇を開きけり〉〈母恋へば母の風吹く蚊遣香〉によって角川照子の魂が浄化されたのではないかと思いました。

妻であり、母としてのつつましい一生を希んだ照子が俳人角川照子とならざるをえなかった道程をお話しました。ありがとうございました。

特別企画Ⅱ

小川軽舟の一句

鶴岡行馬
（鷹）

一　『朝晩』鑑賞

「今の我が家は、標準世帯の黄昏の時代の、焚火の残り火のようなものなのだ」と「序に代えて」で著者は言う。標準世帯とは、夫が働いて収入を得、妻は専業主婦、子供は二人の四人世帯のことである。昭和四十九年には、この標準世帯が総世帯数の約十四・五％で第一位だった。それが平成二十九年には、約四・六％で第九位になっている。一位は無職の一人世帯、二位は有職の一人世帯で、この二つを合せて世帯全体の約三分の一を占めるまでになった。もはや「標準世帯」が、税金や社会保障の給付・負担などを計算する上でのモデルケースにならないことは明らかだ。読者は、この「序に代えて」を句集全体の前書とみて作品を読むことになる。もちろん、「私自身の境遇と生活の色濃く出た」俳句であっても「それが事実そのものではなく作品化されたものであることは言うまでもない」（あとがき）。

サラリーマンあと十年か更衣

「サラリーマンあと十年」という事実を改めて自分に言い聞かせていると同時に、これまでのサラリーマン人生をしみじみと反芻しているのである。あと十回更衣をすればサラリーマンを卒業できる。十年後、自分はどうしているのだろうと想像を巡らす。

梨剝く手サラリーマンを続けよと

梨を剝きながら考える。そろそろ仕事を辞めてもいい時ではないのだろうか。逡巡しながらも続けようと決心する。思いの外、梨の皮を厚く剝いてしまった。

サイダーや有給休暇もう夕日

無理をして有給休暇をとった夕方の切ない気分が「夕日」に象徴されている。明日からはまた仕事だ。残ったサイダーを飲み干す。

遅刻メール梅雨の満員電車より

会社に遅刻する旨をメールする。現代では当り前の光景なのだろう。電車は冷房が効いているとはいえ満員で、携帯電話の操作もままならない。梅雨のじめじめとした感じが「満員電車」によって増幅される。

蟻めきぬ蟻の巣めきし地下街に

巣に帰る働き蟻か上京す

自分を蟻に例える。主人公はサラリーマンの自分であり、自分の視点からみていると同時に外の視点から客観的にみている。それがないまぜになって自嘲の気分を濃いものにしている。

働き蟻足跡ひとつ残さざる

働き蟻の一匹一匹は足跡を残さない。ひたすら自分の仕事をして死んでいくだけだ。しかし、みんなが歩いた跡にはたしかに道ができる。

サラリーマン俳句を取り上げたが、明るい希望はあまり感じられない。それは日本の現状が、そして予想される未来が明るくないことと軌を一にしている。二十一世紀初頭には、一人当たり名目ＧＤＰが世界二位だった日本が二〇一八年には二十六位まで後退している。日本の労働者が生み出す一人当りの利益は、約八百八十万円でアメリカの労働者の三分の二、Ｇ７では一九七〇年以降最下位が続いている。労働生産性が低いのである。それでも頑張って働くほかはない。十五歳～六十四歳の男性は、今でも世界で最も長時間労働

をしているのだ。

庖丁の柄ちかき刃に生姜剝く

たつぷりと独り暮らしの柚子湯沸く

単身赴任となって七年が過ぎたという。一日一日を丁寧に暮らしていることが作品から窺われる。チューブ入の生姜で済ますのではなく生の生姜を調理する。冬至には柚子を買ってきて柚子風呂に入る。

朝顔蒔く転勤先の借家かな

「借家」という言葉が「朝顔蒔く」にぴったりだ。決して新しくはないがこぢんまりした庭つきの一軒家が想像される。

いつか欲し書斎に芙蓉見ゆる家

やがては家を建てて家族と暮らす。書斎で仕事をしていてふと顔をあげると庭には芙蓉が咲いている。希望がある限り未来は明るいと信じよう。

二　軽舟十二月

ここでは、第五句集『朝晩』に先立つ四冊の句集『近所』『手帖』『呼鈴』『俳句日記２０１４　掌をかざす』及び『句集』未収録の作品から月に一句ずつとりあげて鑑賞したい。

一月　読初

読初の短編集に車窓の日

年末年始を家族のいる家で過ごし単身赴任先へもどる。帰りの電車の時間は、仕事へ徐々に気持を切換えるクッションの役割も果たしている。鞄から文庫本を取り出して読む。年末から読みさしにしていた短編集だ。夢中になって読み進むうちに、冬の低い太陽が窓を通して本に当たるようになった。

読初という言葉からは厳粛な気分が漂う。「貞観二年、春日朝臣雄継が清和天皇に『孝経』を講説したのが始まり」とか「建仁四年正月十二日将軍源実朝が読書始めを行ない『孝経』を読んだ」などという謂れによるものだろう。学問の上達を願った正月の儀式だったのだ。

作者には読初に対する何の気負いもない。たまたま場所が新幹線の中であり、たまたま持っていた本が短編集だっただけだ。このような読書も読初として俳句にできると教えてくれるようである。

（『掌をかざす』所収）

二月　余寒

うみどりの赤きこゑ出す余寒かな

芭蕉の「海くれて鴨のこゑほのかに白し」に唱和した句と読める。冬の鴨の声は白いけれど、春になると、うみどりは赤い声を出すのですよ芭蕉さん、とまるで芭蕉と会話しているようだ。

山本健吉は芭蕉の句について「鴨の姿が見えないことによって、鴨の声があたかも見えるもののように、暮れて行く海上に浮び出る」と鑑賞している。ならば掲句はどうか。鳥の姿はますます不分明だ。それは、鴨でもなければ鷗でもない。あるいは鴨でもあり鷗でもある。虚構であると同時に実在の鳥なのだ。「身体を折つてうみどりの匂いさす」という四ッ谷龍の句の「うみどり」について、加藤静夫が、うみどりは「海鳥」でも「う緑」でも「膿鳥」でもよいとしていることが参考になろう（『鷹の百人　鷹年譜』）。春まだ浅い海辺で「うみどり」の声を聞く。その声は赤く（明く）やがて海や雲をも赤く染めてしまうのだ。

（『手帖』所収）

三月　春炬燵

古今集恋の部に入る春炬燵

庭に残っていた雪もいつの間にかまだらになり、遠くからは雉子

の声が聞こえる。空気はまだ冷たいけれど、いぬふぐりは咲き、椿の芽も枝先を突き破って出てきそうだ。季節はとっくに春だ。それでも家に帰れば炬燵が恋しい。正月から読みはじめた古今集は半分を過ぎ、いよいよ恋の部だ。

炬燵の上で、毎日御飯を食べ、仕事をし、本を読む。炬燵は冬のはじめからずっとそこにあるのに、立春を過ぎれば春炬燵とよばれる。なければないですますこともできる春炬燵と、古典中の古典、詩歌集の中の詩歌集である古今集との取合せが、洒脱で、飄々としていて、少し通俗的で、少しも気取っていなくて、つまりは絶妙なのである。

上五中七の「ｋｏ」の頭韻が心地よい。春炬燵も「はるこたつ」と清音で読みたい。

（『呼鈴』所収）

四月　春の暮

こぼさずに水運びゆく春の暮

バケツを頭に乗せたり両手に持ったりして川から水を運んでくる。その水をこぼさないようにしながら家へ急ぐ。そんな様子をテレビで見たことがある。子供や女性の仕事だ。あるいは、わだつみのいろこの宮に描かれたような神話の一場面を想像してもよい。

この句には、情景はなにも説明されていない。にもかかわらず、春の暮でなければならないような気がするから不思議である。春の暮は、時候としての春の暮にも、春の一日の暮にも用いられるが、掲句の場合、暮春の夕暮ととりたい。日永の夕暮のけだるさ、物憂げな様子が水を運ぶという行為に相応しい。

私が小さいころ、家には水道がなく、近所の神社の井戸水を汲んで使っていたことを思い出した。母が天秤棒を担いで運んでいたのだ。私は、母について歩くだけだった。

（『近所』所収）

五月　余花

ラジオ体操曲口遊み余花仰ぎ

毎朝、公園に集まってラジオ体操をしている。夜明けがずいぶん早くなりましたねなどと話をしているうちに、トランジスタラジオから「新しい朝が来た、希望の朝だ」と藤山一郎の張りのある澄んだ歌声が流れる。思わず背筋を伸ばし合わせて歌ってしまう。そして、「ラジオ体操第一、腕を前から上にあげて大きく背伸びの運動から。ハイッ」という凛とした号令に合わせて体操が始まる。体操をしながら見上げる木々は若葉をひろげているが、その中に一本だけ遅咲きの花をつけている桜がある。晩春の残花のような淋しさはなく、むしろ若葉の中にあって堂々としているその姿は頼もしく清々しい。

「口遊み」「仰ぎ」と連用形を重ねることによって、屋外でのびのびとラジオ体操をしている様子や、初夏のやわらかな空気感を表すことに成功した。

（『掌をかざす』所収）

六月　柿の花

柿は花つけみんな無事みんなゐる

平成二十三年六月十一日、仙台で宮城支部小川軽舟主宰指導句会が開催された。この日実施される予定だった東北地区指導句会が三カ月前の東日本大震災により中止になり、主宰の計らいで宮城支部指導句会として行われたのだ。震災後、初めて支部会員四十九人が顔を合わせたこの会に主宰が出句されたのが掲句だ。

「みんな無事みんなゐる」という思わず口から出たような言葉には実感がある。また、「柿は花つけ」の「つけ」がクッションの役割をしてやわらかく下に続いていく。「ゐる」という歴史的仮名遣にもあたたかさを感じる。

こうしてパラフレーズしていくと作者の思いから遠くなり句のよ

さが失われていく気がする。大岡信が言うように、解説するのではなく作品を「黙って差し出す」のがいちばんよさそうだ。

（『呼鈴』所収）

七月　立葵

鋺（かなまり）に豆腐買ひたり立葵

鋺を持って豆腐を買いに行く。スーパーには卸していない旨い豆腐屋なのだ。豆腐が旨いということは水が旨いということ。きっと美味しい酒を造っている蔵もあるだろう。冷奴をつまみながらほどよく冷えた酒を飲む。七月だというのに気の早い蜩の声も聞こえてくる。庭には立葵が咲きはじめている。てっぺんまで咲けば梅雨も明ける。そして暑さはこれからが本番だ。

私の住む町ではにがりを加えて完全に固まらないものを「おぼろ豆腐」と言って、汁にして彼岸や盆など季節の節目に食べる。早朝からボウルや鍋を持って豆腐屋に並ぶのである。作者が買ったのもおぼろ豆腐か。「鋺」とは、金属製の椀のことで『日本霊異記』（九世紀初）や『枕草子』（十世紀終）にも用例がある。「鋺」の字面と音の響きが一句を引き締めているのである。

「立葵」は六月・仲夏の季題だが、私の住む地域では七月に咲くので七月として鑑賞してみた。

（『呼鈴』所収）

八月　秋風

秋風や燃えゆく紙に木の記憶

人は死ぬ時、その一生のすべてを瞬間的に見るという。ならば同じ生物である木も例外ではありえない。木は伐られても紙になっても文字を印刷されても生きているのだ。そして最後に、燃やされ、赤い炎をあげ、黒く丸まり、風にちぎれ飛んでゆく。その刹那に木であった記憶が甦ることに納得できるのである。

この句を読むと、谷川俊太郎の「ほん」という詩を思い出す。「ほんはほんとうは／しろいかみのままでいたかった／もっとほんとのことというと／みどりのはのしげるきのままでいたかった」とはじまる（『すき』所収）。本になっても木であったころを懐かしんでいるのだ。

「秋風」は三秋の季語で、『万葉集』以来、初秋、晩秋どちらにも使われている。従って、山本健吉の言うように「季語の本意は一様でな」いが、この句のK音を多用した明るさは秋のはじめを感じさせる。

（『呼鈴』所収）

九月　月

ニュータウンの小さき葬式月静か

かつては若夫婦と子どもたちで賑わっていたニュータウンも子どもが独立すると老人だけになる。その一室で営まれる葬式は親族だけのつつましいものだ。折しも月はあまねく静かに地上を照らしている。

ニュータウンに住むことは、水洗トイレ、都市ガス、風呂などの設備が整っていることや、鉄筋コンクリートにより周りと遮断されていることなどで庶民の憧れだったのである。開高健は井荻（杉並区）の自宅について「ガスも水道もないのである。トイレはいまだに一穴式で、古式落下法をたのしむ仕掛けになっている」と、団地と比べて自嘲している（「巨大なアミーバーの街で」一九六七年）。六〇年代後半、日本初のニュータウンである千里ニュータウンを天皇陛下や皇族方が相次いでご訪問されたこともニュータウン人気に拍車をかけたと言われる。作者に「風花や新のつくものすぐ古ぶ」がある（『掌をかざす』）。ニュータウンも例外ではなかったのだ。

（「鷹」平成三十年十二月号）

十月　深秋

深秋や見交して笑むジャズ奏者

ソロの終りをベースが目で知らせる。するとすかさずピアノが受け取って更に変奏を加える。お互いが見交して微笑む瞬間だ。なかなかやるじゃないかという相手への称賛なのだ。白い歯が印象的だ。ライブが果て外に出ると寂しい思いに襲われ、先程までの奏者と聴衆との一体感がすでに懐かしく感じられる。

ジャズ奏者は一回演奏しただけで曲を覚えるのだという。二回目は自由にアドリブを入れる。そしてリハーサルはしないそうだ。だから緊張感のある、それでいて伸び伸びとした息のぴったり合った演奏ができるのだろう。バロック音楽でも自由な変奏は許されている。以前聴いたチェンバロ十台による演奏は圧巻だった。盲目のチェンバリストが延々とアドリブを続け終りそうにない。他の九人が苦笑いを浮かべている。やがて両手を挙げて合図すると全員でテーマを弾いて曲は終った。

（「鷹」平成三十年十二月号）

十一月　楷散る

楷散るや素読のあとの箒がけ

寺子屋が想像される。朝早くから子供たちが集まってきて「子曰く、学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや」などと声を揃えて漢文を素読する。リズムにのったその声は聞いていても気持よい。終った後は、部屋や庭を掃除するのだ。庭の楷の木の紅葉は盛りをすぎ、しきりに葉を落している。素読のことだけでなく、その後の箒がけまで言ったことによって一句が奥行の深いものになった。

楷は孔子の墓に植えられたという儒教ゆかりの木。日本では、備前の閑谷学校や湯島聖堂（昌平坂学問所）の楷の木が知られているが、現在の木は大正になってから植えられたものである。しかし、肝心の漢学は明治の新教育によって蔑ろにされ、新聞の漢詩投稿欄は大正七年に廃止されたと谷沢永一は言う（『紙つぶて　自作自注最終版』）。漢詩を作る人も読む人もいなくなったのだ。楷が植えられたころに漢学の伝統が絶えたというのは皮肉だ。

（「鷹」平成三十一年一月号）

十二月　日向ぼこ

見えてゐて会社が遠し日向ぼこ

外回りの営業マンだろうか。会社にもどる時間が迫っているがなぜか足が向かない。ノルマが達成できなかったのだ。公園の日溜りのベンチで缶コーヒーを飲みながら考える。今日のこと、新入社員だったころのこと、将来のことなどさまざまな思いが頭の中を巡る。会社が入っているビルはそこに見えているのに立ち上がれない。増田龍雨に「死ぬことも考へてゐる日向ぼこ」があるが、この句の主人公もふと死を思ったりしたのではないか。

「日向ぼこ」（古くは「日向ぼこり」）は、日向の暖かさであぶることと言われる。『図説俳句大歳時記』の考証には『をだまき綱目』（元禄十）の「寒き時、日なたに居るをいふなり」が挙げられている。掲句は身体的な寒さではなく心理的な寒さを詠むことによって季語の本意を広げることに成功している。

（「鷹」平成三十一年三月号）

初出

「『朝晩』鑑賞」は、「鷹みやぎ」令和元年十月号に「明るい未来のために」のタイトルで掲載した文章を改稿

「軽舟十二月」は、「鷹」平成三十一年一月号～令和元年十二月号まで「軽舟の一句」として連載したものを小川軽舟主宰の許可を得て転載

十五、事務局だより

令和元年度も、総会、研修会、新春賀詞交換会の各行事を計画どおり実施できました。それぞれの行事に多数の会員の出席と投句があり、会員相互の交流が図られたことを嬉しく思います。また、円滑な支部運営は、役員の皆様の御尽力によるものであり感謝しています。

講師の先生方には興味深いご講演を頂き改めて御礼申し上げます。

各行事とも、交通の便の良い「東京エレクトロンホール宮城」で開催してきましたが、土・日曜日の使用希望が殺到し、予約が難しい状況になっています。対応策として、他の会場での実施を検討しなければならない時期に来ています。皆様にご不便やご負担をお掛けすることも予想されますが、ご了解を頂きたいと思います。

支部会報に「特別企画」の欄を設けて三年目になりますが、一定の評価もあり、今後も続けて行くことにしています。「特別企画」には、会員が発表した俳論や随筆などを転載し、紹介するのが望ましいと考えています。俳誌や講演会などにおいて発表されたものがありましたら、事務局への情報提供をお願いします。

令和二年度末には役員改選へ向けた候補者選考が予定されています。候補者の推薦に当たっては、支部活動の意義をご理解のうえ、ご協力を頂きたいと思っています。

最後になりましたが、当支部にご指導とご支援を頂きました公益社団法人俳人協会の関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。

事務局長　髙宮　義治

編集後記

会報三十七号をお届けします。令和になって初めての会報となりますが、皆様のご協力をいただいて無事発行の運びとなりました。心から感謝申し上げます。「会報」は支部の一年の活動の報告と皆様の活動を紹介するという役目を担っております。それを果たすためにも、皆様のご協力をよろしくお願いいたしたく存じます。また、今回、特別企画「小川軽舟の一句」に、作品の転載をお許しくださった「鷹」の小川軽舟主宰に感謝申し上げます。

今年度は、会報の作成に取りかかってすぐに新型コロナウイルス感染拡大のため、様々な活動自粛の中での校正作業となりました。皆様におかれましても、吟行会や句会等が中止になり、作句活動に支障をきたされた方々も多かったこととご案じ申し上げます。このような状況の中で作句を続けることは大変ですが、新年賀詞交換会の講演での浅井民子先生の言葉「日々生きるという経験によって培われ蓄積された想像力は、創造の基」をしるべに、俳句を作り続けることを力として、この閉塞状況を乗り切っていけたらと思います。

（篠沢　亜月）

令和元年度版　会　報　第三十七号

発行日　令和二年五月二日
編　集　俳人協会宮城県支部広報部
発行者　俳人協会宮城県支部
事務局　俳人協会宮城県支部事務局
印　刷　株式会社東北プリント
〒九八〇－〇八二二　仙台市青葉区立町二四－二四
電話　〇二二－二六三－一一六六